

勵まされ、自転車を開業しました。お陰様で店も追々と繁盛しておりました。

昭和二十二年十一月二十日結婚し、一男二女に恵まれ、さらに孫七人、ひ孫二人と幸福の輪を広げ幸せいっぱい、老妻と朝夕感謝の毎日です。

それにつけても、中国大陸の戦野に若くして護国の魂と散華した戦友を思えば、遙か西の方に手を合わせて冥福を祈ること切なるものがあります。昭和六十一年、息子に店を任せ、私は手伝っています。折々に好きな釣りに出かけて、趣味と実益を楽しむ日々です。

強健体となつて

保護員から高射砲隊へ

福島県 山内 勝 衛

私の生まれた町は、あの有名な歌手の春日八郎の生地でもあります。私の生家は荒物雑貨販売業で、両親、祖母、私、弟三人、妹一人の計八人家族です。長

男は満州へ行っていました。私は手伝いとして家業に励んでいました。

昭和十六（一九四一）年五月に徴用令がきて、横須賀航空技術廠で軍艦から飛行機を射出する時に使う「カタパルト」を製作していました。昭和十八年七月、兵隊検査を徴用先の横須賀で受け、第一乙種合格となり現役兵として入隊を待っていました。

「昭和十八年十二月十日、門司市に集合すべし」との通知が来て、家族親戚に別れを告げ、門司に向け出発しました。再び生きて帰れぬと覚悟を決めての門司でした。

門司には現地から引率役の下士官が来ていました。集まった若者は同じ行き先ばかりでなく混成でした。

私の入隊先は支那の高射砲第十五連隊第五中隊（甲一四〇九部隊梁田隊）、場所は北京とのこと。博多で輸送船に乗り釜山に上陸、はじめての大陸に感慨深く、列車輸送で満州経由で北京の南苑の第五中隊に到着しました。建物は中国風の建物でした。

私は身体虚弱のため、そのあと直ちに保護兵となり

北京城内で各中隊からの保護兵三十人と共に保護隊でやさしい取り扱いを受けることになり中隊を離れたのです。三カ月の特別教育を受け、一応強健体になったと認められ、黄河北岸の新郷に移動していた中隊に合流しました。

高射砲連隊は中隊毎に独立して各部隊に配属されるためか、中隊は広範囲に分散し、第四中隊は中支の漢口、第三中隊は北支の山西省と、ばらばらでした。第五中隊は三月末に新郷から黄河北岸に移動して、黄河にかかる鉄橋を敵機から守るため移動、一カ月後には北岸から南岸に移動と慌ただしい毎日でした。

高射砲連隊の編成は歩兵部隊とは全く異なり、第一中隊から第三中隊は高射砲担当、第四中隊第五中隊は照空灯と聴音機担当です。

兵隊の一人一人に三八式歩兵銃が渡されました。初年兵の教育は、基本的な一般教育は歩兵と同じですが、それにプラス照空灯と聴音機の操作等があります。

初年兵で分隊していたのは十人ぐらいで残りは中隊本部にいて、厳しい内務班だったようです。初年兵は一期の検閲前からそれぞれ分隊で十五人（初年兵五人）で勤務していましたから、分隊長の高田伍長の引率で毎日中隊本部に教育のため通いました。検閲の時は分隊から受けに行ったものでした。初年兵ばかりの教育はありませんでしたから、当然分隊には四年兵、三年兵、二年兵と先輩ばかりでした。

当然ピンタは覚悟していましたが、一般によく言われるシゴキは覚えがありません。五回か、六回くらいしかピンタの覚えがありません。その点助かったと思います。

古年兵の出身地も全国バラバラでしたが、四年兵、三年兵が静岡、愛知、岐阜が多かったようです。それから兵舎住まいは北京、新郷まで、黄河の北岸、南岸ではテント住まいですから家族的気分になったのも新兵にとって幸いだったと思います。今、回顧すると内務は厳しくありませんでした。

昭和十九年六月、黄河南岸を撤退、北支の唐山炭鉱の警備のため移動しました。高射砲隊の移動は、すべて自動車等による移動ですから、私ら兵隊は歩かずにするので大助かりでした。北支ではB 29がはるか上空を通過するくらいで空襲はほとんどありませんでした。たまたま敵機来襲の時は高射砲が無かったのか、山砲を空に向けて発射していました。もちろん命中するはずがありませんが、住民に対して対空砲火の音を聞かせて存在感を示したのかもしれませんが。十二月になると静岡、愛知、岐阜出身の現役の初年兵がやって来ました。

私は初年兵教育を命ぜられ、昭和二十年三月まで中隊本部で教育をやって唐山の分隊に復帰しました。

昭和二十年六月、中支漢口に駐屯していた第四中隊に不祥事が発生、わが第五中隊が交替を命ぜられ、私が教育した初年兵を残して漢口に移駐、その後終戦まで駐留しました。

漢口は要衝ですから敵機の来襲も頻繁で、約二〇〇三〇回はありました。残念ながら超高空のB 29が

悠々と通過するのを見送るのみでした。時たま低空で飛来した敵機が機銃掃射しながら飛び去る時、たまたま我が機関砲が撃墜した時は喚声を上げました。

八月十五日以後は漢口の競馬場跡の建物に集結、武装解除を受け、部落を収容所にして、道路工事に従事しました。抑留中の食事はマアマの物が支給されました。

昭和二十一年五月、漢口から船で上海まで下り、六月、懐かしの博多に帰りました。二年半ぶりの博多でした。

故郷会津に帰る時は、米が靴下に二本分と固形燃料が支給され、途中、東京品川駅で自炊するのに役立つことを覚えていきます。

久しぶりの我が家は出征当時と変わらず、家族揃って無事を喜びました。満州の長兄も終戦近くに召集されましたがすぐ終戦になり、ソ連抑留から逃れて居留民の中に入り無事帰国していました。

復員後は家業を継いで頑張っています。